

木と建築を考える「木塾」報告 第2講座「住まいの思想と実践」

講師 高橋修一氏(住まい塾主宰)

平成20年11月15日(土)、INAX名古屋ショールーム・2階セミナールームにて「木塾」の第2回の講座が開催されました。高橋先生の講義の後は、「何でも質問大会」として参加者も積極的に発言をし、盛り上がった講座となりました。(以下、講師の方より、意を尽くしたいと講演要旨に加筆いただきました。)



1. 住まいづくり・ひとづくりはスクラムワーク

①「住まい塾」の発足とその活動

「住まい塾」をつくって25年になる。その前は白井晟一研究所に所属し、坪100万円以下の仕事はほとんどないという世界にいたので、当初は人からは「白井研究所を出た人がなぜ住宅をやるのか?」とよく言われたものだ。

白井研究所はいわゆる徒弟修業という形だったので、以前大学助手として3年間勤務したときの蓄えでつないだが、途中からアルバイトをする必要が生じた。つまらない建築のアルバイトはしないと決めて、配達や道路工事などの肉体労働をしていた。この時の経験がなかったならば、「住まい塾」をやることもなかったと思う。というのは、配達中に、立派な家から意外に横柄な人が出てきてみたり、立派な家というのはかえって人をダメにするんじゃないかと、こんなことを考え始めたのが、「住まい塾」をつくる動機の一つになった。

時代はバブル期で、土地や建物がどんどん売れる中、業者などにだまされたという相談が何件か寄せられるようになり、当の不動産業者や都庁などへかけ合いにも行った。こうした経験から、当時住んでいたマンモス団地で「だまされないための住宅セミナー」を3回行い、参加者もかなり集まった。最終回に参加者から「我々は結局どうすればよいのか(誰に頼めばよいのか)」という質問を受けたが、その答えを出すのに3年程を要した。その時に出した結論は「こうしたらいいんじゃないか、という形を自らの手でやればよい」というもので、これが「住まい塾」のスタートとなった。

一般の人がしっかりした質の家を建てられるための体制づくりや活動資金づくりなどを経て、実際の「住まい塾」のスタートまではそれからさらに3年ほどかかった。その後、広報活動も行い、金もないから使用料が無料に近い区民センターなどの施設でセミナーを開き、それでも受講者は回を重ねる度に増えていった。新聞社も「設計者の草の根運動」的な位置づけで扱ってくれたのもよかった。そのセミナーを通じて、実際の家づくりへとつながっていった。

街の中で、立ち止まって見るような魅力的な住宅にはなかなか出会えない。この日本の住宅の貧しさはいったいどこから来ているのか?その原因は住宅に直接かかわっている、建主・設計者・施工者それぞれにあるのは明らかであるのに、その三者個々に聞いてみると、だいたい原因は自分ではなく、他人にある、ということになっている。住宅を良くするためには、この三者がそれぞれに反省し、その反省を具体化すること、そ

してその三者が連動する仕組みをつくり上げること、これが「住まい塾」活動の基本理念であり、私はそれを「建主・設計者・施工者の三者のスクラムワーク」と呼んでいる。

「住まい塾」では、設計者や施工者がそれぞれ研究会や強化合宿を行って、自らの課題を設定して改善することを常日頃やっている。設計者と施工者だけでなく、建主も毎月の勉強会の中で住宅に対するしっかりした考え方や、判断力、要求を身につけられるよう努めている。

②設計者に求められるもの

普通、設計者とは、住宅を機能的にプランニングし、法的な制限もクリアした上で図面上に造形化できる者を言うが、それだけでは建主との信頼関係を築くにははなはだ不十分だ。間違えてはならないのは、設計者だからといって建主より生活センスがよいとは限らない、ということである。設計者は生活者としての豊かさを兼ね備えていることがとりわけ大切である。

私は「家づくりは生活づくりである」と考えている。住む器が変われば生活が変わる、そこにこそ家づくりの意味がある。「住まい塾」では設計の最初に、必ず建主の自宅を訪問するようにしている。これまでの住まい方の状況が総合的にわかるので設計に生かせる。また、建ててから1年、3年の無料点検を設計者・施工者が一緒に行い、10年点検も希望者に行っているが、3年位までは緊張感もあって片付けもされているのに、10年位経つと足の踏み場もないような元の生活に戻る家もめずらしくなく、器を良くしても生活が全く改善されないケースもしばしばである。この生活の問題に手をつけていかないと、結局住宅は本質的に良くなっていかないとと思う。

そうした意味からも、設計者は生活者としてもプロであり、暮らし方が豊かである必要がある。「住まい塾」では朝7時から1時間は皆で掃除を行う。また、昼は当番制で食事を作る。今は基礎的な生活体験ができていないものが多いので、こうした最低限の体験を通して、食事のマナー、礼儀、感謝の心などを身につけて「人間力」を磨いてゆくよう努めている。これは、設計者が信頼されていくには不可欠なことである。また「住まい塾」では週のうち2日を自宅研修日としており、それぞれが課題を設定して自己修練するように言っている。「豊かに暮らすことこそ大切である」と感じさせるのは設計者のひとつの役割であり、そのためにも自らが豊かな生活者たらんとしていることが大事なのだ。

今の大半の家づくりは設計者不在と言っていい。音楽に例えるなら、作曲家不在で曲が演奏されているようなものだ。

いい音楽にはいい作曲家、いい演奏家、いい聴衆が必要なように、いい住まいのためにも、いい設計者、いい施工者、いい建主が必要である。そうなるための具体的な手立てを講じながらスクラムを組んでゆく必要がある。

2. 塾生によるグループ討議と代表者による質疑応答

①設計を終えて工務店に相見積をとるが、施工者と線ができてしまう。「住まい塾」ではどうしているのか

初めての地域では例外的に相見積をとることはあるが、入札や相見積は行わないのが住まい塾の原則である。決められた予算があるので、それについて徹底的に施工者と話し合い、詰めてゆく。そのためには工事費についての確信や確たる基準が必要で、それがないままでは判断基準が金額だけとなって、どうしても上意下達になってしまう。金額だけで決めるというのは人間らしい原理ではない。

②資料にある「ローコストでの家づくり」とは

坪単価でのローコストではなく、無駄なことは省いて真のローコスト化を目指している。普通にやれば坪単価100万円かかるところを、徹底的に無駄を省いて80万円以下にするといった努力のことを言っている。

③ハウスメーカーも高いレベルで家づくりをしているが、プレハブ住宅についてどう思うか

大学の助手時代には工業化工法の研究室にいたし、工業化住宅にも一定の社会的役割はあると私は考えている。だからその役割を健全な形で全うしてほしいと思う。ただあちらこちらがプレハブ住宅だらけになっていく、といったようなことは問題だ。今はプレハブ住宅が問題というより、伝統構法や在来構法の方がより問題が深刻で、旧態然としてハウスメーカーにしっかりと対峙できないところに問題がある。ここをどうするのか、が我々に今問われている。

④豊かな住まいをつくる上で、ここだけは引けない、という場面は

建主と価値観が共有できないとか、いい家をつくる関係が築けないと思う場合は、途中まで進んでいても、こちらから断る場合がある。どんなにいやな仕事でも来た仕事を断っては生きていけないなどという人もいるが、そうした姿勢は中長期的にみるとそのような依頼をさらに呼び込んでいくことにも通じていく。自分の目指す方向をしっかりと見定めていることが大事である。それを支えられるだけの人間力も鍛えておく必要がある。そうした中で建主、設計者、施工者が連携をはかり、お互いに自由に意見が言い合える関係づくりが大切であると思う。

⑤賃貸木造住宅で思想をもって設計に取り組みたいが、相手がいない住宅でどのように考えればよいか

マンションの改修を依頼されることが時々ある。でき上がったものを壊してやり直すのだからダブルに費用がかかる。最初に質のよいものをつくっておけば、こんな無駄な費用をかけずに済んだのに、とそのつど思う。私もこれまで木造の賃貸住宅を数軒手がけたことがあるが、設計者のありようによって賃貸住宅でももっと質の高い空間をつくることは十分可能であるし、人々にもっと豊かな生活の場を提供できると考えている。

⑥設計を終えて、施工者からの見積段階で自分では適正と思う予算との違いにいつも苦勞する。予算についての基準はあるか

我々も同じように苦勞してきた。これまで600棟近い住宅の中でその辺の苦勞なしに完成したものなど一軒もないと言っ

ていい。施工者ごとに見積項目が違うとチェックと判断が大変だし、不公平にもなりがちなので、「住まい塾」では見積書式の統一を行った。項目ごとの単価基準もある幅で設けている。また、予約制で月2棟、年間24～25棟のペースで設計しており、そのデータを保存し見積委員会で分析・検討し、適時見直しをしている。

⑦建主とのかかわり方で、何をクリアしたら設計に入るという基準はあるか

お互いにフィーリングが合うかどうかは大切な問題である。人間にはどうしても相性というものがある。お互い共感を形成するまでのプロセスが必要で、その共感がなければ家づくりは成立しないと私は考えている。

⑧10年経ったら元の片付けられていない家に戻ったという例は、本質的には別の家のほうが幸せだったのではないか

そういった考え方もあるだろう。あるいは散らかし放題でも平気なような家の方がなじみやすかったかもしれない。しかし私の言うのはそういうことではない。世の中には片付けたくとも片付けられない人も沢山いて、こういった人は年々増加傾向にあるのではないか。本人は決してそういう状態を望んでいる訳でもないし、よしとしている訳でもない。こうした場合、いくら収納を多く作っても問題は解決しない。夫婦間でも感覚や好み、片付け度合いや生活上の価値観等に違いがあり、あまりの大きさに離婚してしまった例もあるくらいだ。そういう人達が我々のところで家をつくりたいとやってきたのだ。さてどうする？これが我々に課された具体的な課題であるということだ。

⑨「家づくりは生活づくり」というより、その人に合った家づくりの方が良いのでは

「住まい塾」では年10回の勉強会を25年間続けてきたが、毎年12月には「豊かな住生活とは何か」をテーマに繰り返し、繰り返し話し合ってきた。それぞれに生活観は異なるが、皆がそれぞれに考えることで、自らの方向性をはっきりさせることができる。家をつくるまでは設計者の役割が大きいですが、どう生活していくかは基本的に建主に任されたことなので、こうした勉強会を通じて、これ程大きな経済負担を抱えながらも家をつくるというその目的はいったい何なのか、といったことを考え合っている。私は自分なりに生活が変わらなければ、家づくり変える意味は薄いと考えている。

⑩発想の環境について

一年の1/3は山の中で生活している。そこで気づかされたのは、日常の場では、常に外から求められるものに対して反応しているだけだということだ。これに対して、求められるものが何もない状態に長く放置されていると、今度は逆に内側から自然にインスピレーションが湧き出てくる。そのインスピレーションは全く予想も予期もできないものだ。この自然に湧いてくるものの中にこそ、個性というものがあるのではないか。

3. まとめ

「木塾」の第2回目は、住まいに対する強い思想をもって住まいづくりを行っている高橋先生をお迎えして講座を開きました。参加者もそれぞれの分野で、それぞれの考えを持って建築に取り組んでいます。「住まい塾」の取り組みに触れ、討論することで、新たな発見があったと思います。学生時代、あるいは建築に関わりだした頃、友人や関係者と熱い議論をしたことを思い出した時間でもありました。